



私の中で…ワンちゃんの

お〇んぼ様が暴れてる♡

主人公甘やかし

あのね、キミと…ごたくてごたくて…

ずっと、我慢してたんだよ

黒髪JKさん! 俺を愛せよ 止めと下さい

地球外生命体☆モキュ(∞)

あ。この人。王子様だーって思ってたら…

アソコを膨らませてるんだもん

ふうん。これが先生の『お○んぽ様』ね。

想像より立派じゃない。ふんふん

大空ひかり

才色兼備の委員長。子犬のような男性が好き。
そそり立つたくましい男根が好きで、
「お○んぽ様」と呼んでいる。

七海風砂

電車の件で主人公に運命を感じている。
ひかりとは中学の同級生で幼馴染。
今も仲が良い。天真爛漫。小柄で巨乳。

「ふあああ。んっ。もう朝かー」

俺はアクビをしながら、独り言を呟っていた。

今日から俺の教師生活が始まるのに、眠くて…ぐう…

俺は、手早く準備を整え、カバンを手に取ると玄関へ向かった。

駅は朝の通勤・通学ラッシュで混み始めていた。

これから毎日、この混雑の中を通勤するのは、先が思いやられるぞ。

「あわわわ」

あぶなっかしいなあ。

なんだか、人並みに翻弄されてる子が居るな。

女の子は奇跡的に元の位置に戻ると、タイミング良く

電車が到着した。

女の子は吸い込まれるように、電車内へと入っていく。

何はともあれ、事故が起らなかったらなくて良かった。

電車内は混み合っていた。

あ。さっきの子だ。まだ人混みに翻弄されてる。

徐々にコチラへ、近づいて来た。

「すすす、すみません」

俺に軽くぶつかり、恐縮してるようだ。

「いえ。気にしないで。それより危ないから気を付けて」

このままだと、さらにアツチコツチにぶつかるんじゃないかな。

俺は女の子と人混みの間に入り、防波堤をしてやる事にした。



しかし…この子…可愛いな。

黒髪ツインテールの可愛い女生徒だ。

顔が近いせいか、女の子の優しい香りがした。

黒髪の甘い香りが…性欲を刺激する。

かなり、密着した状態だ。

匂い嗅いだって別に呼吸してるようにしか見えないだろ。

これが女の子の香り。いい匂いだあ。

調子に乗って楽しんでると、


俺の股間が異常事態に陥った。



あ。ヤバい。俺…勃起ってる。
かなり、バキバキになってしまった。

その時、女の子の手が股間に当たった。
「あ。すみません」
この状況が故意では無い事をアピールする。

女の子は手をどかすと、無言のまま俺の胸に手を置いた。



この状況って一体…何？

どう見ても、好意的に抱きついてるような感じだが…

その時…

女の子は、他の乗客に聞こえないよう、

小さな声で囁くようにこう言った。

「ねえ。コレ…辛くない？」

「なななな、何を…言ってるんだ？」

動揺を隠せない。辛くない？って…勃起してる事を言ってるんだよな。

この子、分かってて…言ってる？

いたずらっ子のような表情を浮かべ、女の子は
俺の股間のチャックに手を掛けた。

ジイイイイイ



今日から、このクラスを担当させてもらいます。
俺は、型通りの挨拶をしていた。
比較的、大人しそうな生徒達のようにだ。偏差値高いからな。

「それじゃあ、コッチから順番に自己紹介して貰おうか」
生徒達が順番に自己紹介していく。
と、クラスの中に見覚えのある顔があった。
今朝の電車で遇った…あ、あの子だ。

まさか、俺の教え子だったなんて…やりにくい。
俺の悩みなど、この子は分かってないんだろうなあ。
ニコニコとコチラを見つめてる。

『ななみ(七海) なぎゃん(凧砂)』といます。
明るさだけが取り柄です。宜しくお願いします」

「大空(おおぞら) ひかりです。去年は委員長をしていました。何か困り事があれば、皆さんいつでも相談して下さい」

へえ。シツカリしてそうな子だな。

「先生も、何か聞きたい事があれば、いつでも言して下さい」

「は…はい。よろしく…お願いします」

聡明そうな、ひかりの雰囲気気圧されて、思わず敬語になってしまう。



「放課後」

誰も居なくなつた教室。

これから、この教室が俺の職場かあ。

「せんせー」

凄い勢いで、なぎさがコツキに来た。

「ええい。近づきすぎい。少し離れろ」

「なにになにないー。つれないなー。今朝あんな事したのにー」

俺は慌てて、擦り寄ってくるなぎさを引き離す。

「えー。先生冷たいよー。そんな仲じゃないじゃん」

「誰かに見られて、変な噂になったら困るだろうが」

「こんな時間、誰も来ないよー」

「そうなのか？」



「もうすぐ新学年の模擬テストだからねー。
みんな早く帰って勉強してるよ」

「そ、そうか。お前は帰らなくていいのか？」

「『お前』じゃなくて、『なぎさ』だよ。なぎさって呼んで」
「それに私、カー見えても、成績優秀ですよーだ。ご心配なくー」

「今朝のこと考えてたら…私…カラダが熱くなっちゃって、
勉強どころじゃないよ。」

「ちゃんと、責任取ってくれないと、私…今日の夜寝れないよー」

「責任取れって言われても…どうすれば」

「それじゃ、コツキに来て」

手を引っ張られ、教室の前へ移動する。



数日後…

「明日からテストだ。今日は早く帰るように」
ガヤガヤと慌ただしく、生徒達が教室を出て行く。
さてと。職員室行って、早めに帰るとするかな。

「先生。ちょっといいですか？」

お。今年も委員長になったひかりじゃないか。
それにしても、ひかりの髪は黒くて長くて綺麗だなあ。
授業中も、ついひかりの黒髪に目が行ってしまっただよなあ。

「どうした？」

「「「じゃあ、ちょっと…」」」

他の奴に聞かれたくないって事は…悩み事か。
「わかった。じゃあ空き教室に行くか」



別棟で使われてない教室へ移動した。

▶ **PLAY**



「で。どうした。何か悩みか？先生に出来る事なら力になるぞ」

「相談事ならありますわ。神聖な学舎で、
こんな事する破廉恥な教師が居るんですの。
何とかして頂けないでしょうか？」

ひかりのスマホには、なぎさとの痴態が映っていた。
撮られて…いたのか…

「良く撮れているでしょう？」

「な、何が目的だ？俺に教師を辞めろって事なのか？」



▶ PLAY



「新米教師をクビにしても楽しくないわ。なぎさはね、私の幼なじみなの。

それを、こんな目に遭わせて。許せない」

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

「全く。まだ、自分の立場が分かってないようね。

『どうすればいいんだ』じゃないでしょう？ 『どうなさいますか』と言いなさい」

「ど、どうなさいますか」

「そうねえ…なぎさと、同じ目に遭わせてあげる」